



正校

水畫珠法

前篇

四

僧 5

234

4



北窓瑣談卷之四

梅華仙史橘春暉著



一 昔者朝貞氏の須を命じて蔓草の纏ふる皆たりふ巻をのこ  
天地乃自然ふ任まればたきあり。是る日夜天の危旋まじふ  
由急ふ天乃氣ふ引まじたりふまよふあり

一 松永貞徳の著述乃去に戴恩他とつり可なり。貞徳生涯恩  
義を載せしむり載られしうとぞ。余のまじる書残るるしと  
る書の主意今時乃風と遠い古人徳は乃風義難有むむ  
あり

一 大坂天王寺六時堂の前乃鐘ハ聖徳太子の舊物とて真乃黄

5  
284  
4



一集外歌仙と狩野運長小舎せしれ國画を添くきたりとぞ

峯炭竈

平常録

千葉及常胤六男  
東六郎胤頼末

立のふね烟なまは炭竈成そともいさやふ船のさくさ

残春

津守國豊

任吉社勢  
信長時代人

ゆら山とくろさたを忍し人のちりふたふた乃古はと

山月入簾

浄通尼

光隆院殿後室

秋乃夜の露れ玉の波をあまを程く頼りの山端乃月

春脱言

宗長

後拍原院御宇  
連哥師

春柳のあけけ人乃ゆき道あふ御代のを波を長閑丸

寄舟巻

宗碩

連歌師

さり糺り糸流したる思ひくもむかへ無た君そつれあき

月前厂

宗閑

能登

た初る雲井の層け暮よりも暮あけは月乃影りな

曙雪

正徹

徹書記  
招月庵

公孫の雲井さうらに飛濱く杉のふねる夜をけあけ乃

約達巻

正廣

世日頃、正廣ト云

物簾の糸よりく月乃更ぬらん月夜の袖乃わきく

一夜



田 鹿

玄 音 細川

さげふすこ小田守 残も無り 幸の遠さかろをそそ慕ひてや

行路時雨

公 前

連歌師

かつらとる 竹井山 風吹しよりやまぐ時雨乃雨いそぐら

柳

元 就

毛利太膳大夫

喜柳の糸よりまきそのまき 怪り小舟巻乃初やうき

閑 居

氏 康

北條左京大夫

中し小清ぬ庭と塵もあし 風ふ海のま類山の下巻

松 間 花

晴 信

武田太膳大夫

立並ふこゝろあふれ山片くく 松ふ千年の色をそあうま

寄 松 祝

氏 政

北条

方礼君ふのの禮々怪うけ 松乃千年の華代乃よ家

山 家 初 老

尚 經

惣社坂本

山熾乃初けの煙 寺志ある時雨し 空に冬をそあふり

月 思 往 事

長 嘯

東山若狭少将

世々の人乃月々 極老しかなきそし思ふことし ぬき袖の角

圓 月

宗 徳

連歌師

清又得すの月中ぬ 冥乃戸茂 惟く由家し 己月乃誠也

月 前 述 懐

心 敬

僧都連歌師

まじりくもあふ 庭も志し 勢身をあふく 守れたるを 月可南

萩毒琴

基佐

堀井越前

淋ししの種を植し育し小菖琴を急を急を萩

月有遠恨

肖柏

牡丹花

世をぬらし様うさしと字人の心づきを打ぬ月乃うさ

山家燈

親當

嵯川新左衛門

善くこそ人任事も志しれはまかこ山彦乃哀れとありし大

暁神樂

冬康

安宅権律師

うさ夜の暁ゆき華より種代ありし此鈴の音より那

河五月雨

氏真

今川

うさ川流るる志し流るる若くも捕りかろ五月雨乃そ

寄枕恋

昌叱

里村

あまれもうししよるをいも知る人あせん小夜の舟楫

江辺寒月

政一

小堀遠江守

一可習えてよせある波の流るる氷入ら乃そ昨夜寒月

月

貞徳

松永

雲く見えしそ有乃月少うかほしよや吉野の桜なりとも

一橋本肥後守所藏は信西入道の真跡乃舞樂乃園の喜物乃

写しあり。乐曲數多あり。其中小合巻とく吹指の巻をとり小

今ひしと顔小正曲の八段まで斜にそむくと吹り。是古昔ハ

竹の吹中と思ふ。又と樂家も手近く吹曲りも舞の姿  
云畢勢もて今乃作回ふある。太神樂。獅子舞。多岐。輕業  
切ふのいふもの多し。推樂ハ古代の物もく殊に唐土乃りふ  
まご。今乃りもれ章雅多る。今乃りもくハ世俗の淫樂とハ格不の  
物もく天地骨壞の遠いあるものや。人皆思ひ居れども人  
情も古今同じしものや。今乃り舞中今乃俗人の情もやある  
りも多るものや。今乃り

一系部子幸通下立賣小極を賣老翁あり。吉久とり小寛政八  
年丙辰百十歳より壯健なり。能治乃職をり。勤久毎日  
自身小極を法方にく賣出りも。故一系殿下か

鉄石軒より小號を賜ふ。在外王侯貴人争ひ居り。壽乃字を  
と成去りぬ。小極をり。老翁とく。能治乃鉄石軒吉久と  
録し。賣を。壽九十七歳亦。壯健なり。夫婦より。以上  
數十年の妻を保つ。今乃り。同如。生小あり

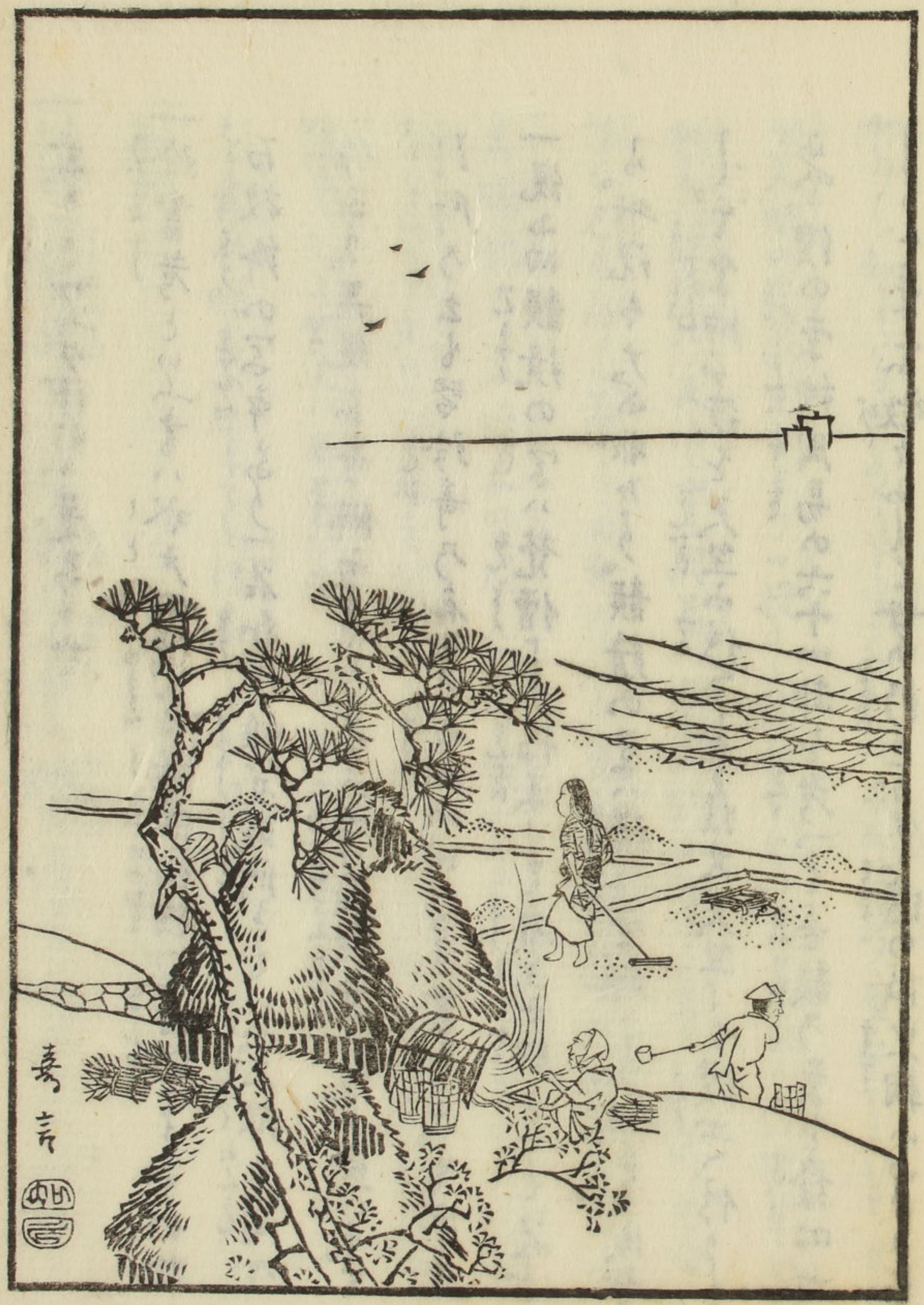
一寶永年間  大納言殿ハ管絃乃達人ありしが。耐更小  
琴乃。能治もく。御同列の御家。延喜御物の名。琵琶  
巖と。今乃。昔より。持傳く。能治も。御。每。度。彼。亭。小  
。今乃。ひ。ひ。彈。し。能。治。も。一。不。能。く。成。小。む。暫。時。借。り  
。今乃。成。作。られ。彼。卿。お。能。治。も。拜。領。乃。品。家。之。後  
。持。傳。く。能。治。も。寶。永。門。外。へ。出。し。能。治。も。を。能。治。も。能。治。も。能。治。も。







家小遊あそびししよの河かしふを家乃庭いえのにわまく塩しほを焼やくはし  
 い河かしふは尻しつぽとりしよのや河かしよをまるしよをまるありと知しし  
 せし理し漸しをまるしよをまるめく漸しをまる時とき小こを砂すな乃上のうへ  
 小漸こし成なり汲ひ入いるにそゆの礼れいききる序まふ茶ちやままく前まへ狭せまく末すえ  
 く河かしよ物ものをあまるしよ上うへ小漸こしを汲ひ入いるありし葉はまま  
 編あむ物ものを尻しつぽとりしありとおたり。後のちままく方言べんごん遠とほく  
 ふれと他の園そのとほのうゑままく物ものを尻しつぽとりしやままくと浴ゆし  
 尾張おとづら乃天野信景著述の書乃名を尻しつぽと名付なづけし書  
 の最初さいしゆに尻しつぽの鏡かがみありしよを鏡かがみハハのあり鏡かがみあや。余  
 いやと尻しつぽ乃初巻しよせんをまる。昔むかしふ人の覚おぼへる雷かみかみ盆ぼんのまるをまる



壽  
 三  
 四  
 五



多々産せり山田の浦乃人木内古盤此穴小遊をいふゆゑ  
 一スランガステイニと云石を産物と云 蛮人等あり 持後る  
 一 膿より腫物の口潰れる時此石を瘡より尚れこく膿  
 けを吸ふ膿を石好めけく是を石炭水中入れば  
 吸ふ膿をこしく多中此土出せたり。是は石炭を先  
 一 炭各小用多の腫物の膿を吸ふ事ベントウサ小腸よりとぞ  
 石乃色赤と黒く光りく柳針眼あり 迎來と偽物と云々  
 古小付より真物より劣ぬ程あり 如意道人楽遊のとき  
 和香小付石所のゆをせし一塊を持後り余も好む。遠近  
 掛川乃近在サイゴウ村蛇谷と云處小産を此地乃方言小

古付石と云石の色赤く砥石小似たりく古小付。形状と大  
 番産ゆあり

一 絨前小敷賀系仁在馬と云く余も多事格不意意の人あり  
 此人用のより所々 數月余く登り居し 五さるよりあやうき  
 事小代と云より二歳小あふ岩助と云小児を喜育し 下婢  
 一人召し居るふ。是は旅りのあやうき外小男子小むれを  
 海しと云又一人廿七才許ある下婢をやめし。是も茂る居る  
 寛政九年丙十月のよりあやうき。夜よく彼下女遊のあやうきをた  
 くれむ事小用是て持病小痰強た下女あれむ又痰や發する所  
 小やと思ひし。枕より小産る有咽の煙火滑在る小兒を

懐小抱あづり記おとこをうら五明の燈火を照し。下女がらよ  
 と床の間の障子取用たふふ。下女が枕のふ小屏風のりよ  
 何うたたよの勤まうアえまはむ。何やんと五明の燈火をうら向  
 又らに下女が首引結髪の中や屏風のりよ引添ひ一人は  
 屏風く登り付てらあち登り付てらあちる。絶ふ妻もころり  
 膽消魂飛ぶ気絶もをなく。笑しつ小児を抱に右ふも驚ん  
 りを忍れ右ふ手に小児成うくたり。け手ふを明の燈火をうけく  
 空傳ふ居さるり。物も去りく五明の燈火をうけく。屏風く登  
 下付てらあち。く屏風のりよ。又下女が  
 又たおとこを五明の燈火をうけく。妻は下女成り記し。ほをうけく。

小降子引きと又我围小入りく夜明るまう。月も合ひを満し  
 を引被れ布く夜明るを抹も。里方の大坂を方一人く急  
 小只の長と昂を叫び。あつこのをわう。何とわく化のふ  
 妻く下女いへばやぬ。び下女仁右傳つあち。中をうけく。やうい  
 事わく。近た町の者なり。世上の伴説を忍れ。けり。坊  
 秘しと一人の初り。あち下女。ふ。あし。を。唯。京。小。所。多。支。仁  
 右傳つ。けり。若。来。る。け。い。て。ふ。余。う。多。年。親。し。た。り。や。れ。い。み。し  
 くと。妻。く。中。来。ま。り。後。ふ。を。妻。も。京。に。ぬ。り。任。れ。い。余。も。妻。小  
 物。妻。く。ゆ。り。あ。ち。あ。ち。の。り。あ。ち。八。舞。く。所。く。輓。轡。首。を。足  
 へ。り。いと。奇。怪。乃。り。わ。り。る。余。此。を。を。傳。ふ。け。く。考。あ。り。

妖姪もくも病の然ししむるもあふし。瘥まれば人々  
 陽氣願上あきらむるもそそ氣形を結んむすぶ者より上ふゆるふえ  
 し。そ人の寐かぬるをそそふ真の者もそそ付くも瘥  
 し。離魂病の類ありし。彼下女屏風乃内小寐かぬるもあふ  
 水で。着る身に付居まりや多し。や又そそしと書女語りた  
 一寛政辛亥臘月江戸下谷の火屋久居侯乃臣福地三を更大  
 不働まりし小をほ  
 官かんより侯へ達せしむる云々  
 け頃次乃そ比類ありた働た浦に數ヶ所をより時文呈輕  
 乃引廻ひきまわり方行屋の候 上岡小達し奇特小思し居る乃  
 同主人より褒美し然るもしし。海小微細乃陪臣乃功

せも々極小賞せしむし。士氣を勸すすむるの策をえしむる  
 た御代ありた

一元の御家可より榮笔の侍とく朱文公家禮の候小思えし

此君一節瑩無瑕夜聽松風漱玉華萬縷引風啼蟹眼  
 羊瓶飛雪起龍牙

一寛政四年壬子二月卯ひせんのふしおふ雲仙嶽大と火燭と。數日地震數  
 し。同四月朔日の夜成刺道いぬのくさ至仙嶽の下乃前山まへより  
 が鳴系城乃上あふ尚りある山二ふ礎いきい大出い。同時小嶋原海中  
 よりも大艦出洋浪山なみのなく湧ありあり島原城下の町しに  
 外傳系須乃村あり佐嘉領さかの南海小隊なる村むら肥後西乃西面小

除多村。天草嶋の海濱より民屋皆同時に没溺し。嶋  
系より死亡の人凡三萬餘。肥後より二万餘人とし。其外  
備前等も亦準じて夥しに死亡あり。其夜海中亦小島嶋  
七八十も出現したりとぞ。去年霜月はより雲仙嶽昭如し  
て妻小島里にまで一と云く。後分ち地中より火乃玉出或ハ火  
柱あふまるとも毎度ありとぞ。二月以中九列惣俣地  
震多し。肥前を而しく降く一日の間に四六度震りし  
も五々。四月朔日大破乃時高嶺系の地を熱し。草履と  
る歩折なりと云く。其嶺山破き大出しとぞ。其前小嶋  
系近辺の草木一夜のうちに何れのものも係小花咲く人皆足物

小出し。往なりた安永己亥の冬十月朔日より薩摩半島檮嶋山  
大山燃く。十月十日中々修勢尾張志兼河造やまくもを庚津  
たり。其後天明年中亦信別濃間嶽大山燃又々其乃云仙山嶽  
たり。檮嶋山乃時ハ大隅島の海中亦新嶋七つ出現せり。余も親  
しく見及びたり。海中津浪も々々其のく云しありと。但大嶽の  
後數日しく山上より大水漲りり。其島乃民家皆流き死  
亡乃人多と多し。濃間山大嶽の後も數日しく山中より巨  
水大漲りり。利根川を押しり。其末江戸近も亦勢衝たり  
其島船數十里乃同人民の死亡數万人不及なり。濃間山乃燃き  
系都近も亦云く。唐云く小山崩き川濁くハ凶事と云あり



りしぬる小。海中新小嶋く成湧出せるるハ玉の増たりとも言  
 へぬ。その年去仙嶽破きく後ハ地下の蔚陽大ハ棄遣せしむ  
 小や夏小氣王氣候もど頃小く五穀乃豊熟近年に足る  
 秘なり。気候和順ある故也。脚氣中暑下利等の病無く人  
 民健固もく例乃夏小災なり。これむ古凶禍福ハおたふ物もく  
 九列の死亡秘ハ天下ゆく有餘あるや造化の多あり不可  
 思議乃そのなり

一肥後玉山中小方言トウタラト又草河里。煙子乃兼小似るる云  
 毒草あり是代食く桑狂く三日経きさ久むよりドウタラ  
 とく良草のりや

一近江以薩摩小何を秘書成好く玉を切事成是く玉を飛ち

① ぬけ小糸道具の火河じのく鉄もく作里全録の廻り  
 茶を付く燈火ありあづ乾し水糖をたしる小。茶葉小  
 て暫時小何より小彫りあり。茶葉小大あり小彫り小成  
 るあり。又錐の先小彼茶成付く茶糖をそく穴成穿ち  
 針を彼穴小通し。ぬけし茶糖を時々暫時小を穴  
 大ふたりくいの秘もく細工成施を分たあり。水糖の器物  
 小彫物もく印章もく彫刻のす小彫りあり。鹿見嶋  
 乃増田並治郎けり。河原十左衛門結りた

一贗茶種ハ 公儀御製禁のりある小奸猾の毒人ありて

價貴た茶種も質作偽造の物多し。多進くハ人參懸膽テリ  
アカヲクリカニキリの類。廢物あり。ざるハ稀なり。人皆病危き  
乃時不齒を多くハ家を破るるも金を出し。是等乃茶を買  
求多く用ふ。真物あり。され何の志し。も多く。家を破  
至命成る。是も。実小の多し。乃。多。里。あり。茶種を偽る者多  
情む。金。第一なり。多。外。の。書。画。古。器。物。の。類。を。偽。作。し。人  
成。欺。く。ハ。あ。し。れ。る。も。多。く。ハ。云。あり。唯。既。妻。乃。物。多。く。人。の。目。を  
悦。し。む。ま。む。多。く。し。た。れ。む。真。不。過。り。く。似。く。し。た。り。も。多。く。作  
あ。く。も。妨。か。し。し。も。思。り。も

一 三谷丹下茶湯ふ。过何某助生屋何某成初く招たしふ兩人

路次小のり待合小あり。早鐘なり。く。多。多。く。茶。西。り。奔  
遠人駁し。过。加。列。屋。を。入。り。兩。生。屋。ハ。新。月。代。ノ。籠。入。り  
唯。常。の。時。も。兩。人。も。多。く。以。け。付。合。た。り。た。れ。む。心。そ。く。小。威  
く。丹。下。出。迎。ふ。對。面。し。て。以。り。成。の。金。を。出。し。し。と。侍。小。秘。金  
て。り。至。人。出。來。り。後。鐘。り。小。塩。う。ひ。く。最。早。以。り。お。り。出。去。る。所。に  
や。も。も。因。り。も。初。の。招。待。乃。も。た。れ。も。多。く。成。禮。成。悞。り。至。人。と  
や。物。違。ふ。一。刺。小。も。對。面。し。て。辭。し。ま。う。む。と。一。刺。の。る。も。千  
と。多。め。る。也。地。く。林。岸。ふ。秘。乃。多。く。至。人。も。多。く。上。里。の。た。を。多  
や。不。開。く。出。來。る。兩。人。嬉。し。く。立。向。む。至。人。一。札。し。て。招。合。日。ハ。幼  
く。至。君。を。多。請。た。し。し。に。お。あ。し。く。多。多。乃。沙。法。中。を。小。多。り。え

一、雨風の月あるも粗承り居之を。多ふ人しくも其君の  
 御宿所乃事吾を尋せ。又大なる袈裟を拵く。只今代中  
 来りて命しく入。まゝより御殿織笠。此も用意なき御両家  
 とも小代前中。おれともふ。此方の玄關小い之。居て是のあり。糸  
 末あり。拵り飯を調へて。まゝ出。しをゆいぬ。残さ小い。い  
 急変のすなれ。も糸の湯。又の日中入。命しく。今日まゝ。まゝして  
 袈裟し。終へ。是より御宿所へ。拵進く。之を。まゝ。出。ぬ。あ  
 上下。まゝ。取。急。た。性。来。し。終。へ。ハ。足。苦。し。う。る。命。しく。且。ハ。い。る。ま。ゝ  
 御用も。遅く。小。の。中。命。され。ぬ。か。と。ま。ま。の。中。せ。あ。り。と。い。く  
 入。ぬ。時。雨。人。の。終。し。と。い。え。ん。方。あ。し。教。の。ど。く。と。他。乃。人。り

一、つら早く。命。あ。り。し。ゆ。り。れ。ぬ。雨。人。も。小。丹。下。り。糸。の。功  
 者。む。り。成。終。身。感。し。語。り。合。り。い。る。を。追。来。速。水。宗。達。洋  
 一、丹。下。糸。の。乃。ま。お。は。ぬ。人。あり。り。か。か。る。り。命。しく。ハ。速  
 小。出。進。く。マ。門。く。入。た。ぬ。也。折。悪。毒。火。の。沙。汰。あり。皆。公。利。の  
 一、の。り。あ。り。し。を。承。り。及。い。と。を。出。遠。ま。り。海。へ。終。へ。糸。湯。も  
 又。の。日。中。入。命。しく。告。ぐ。入。ら。命。しく。こ。が。智。計。作。略。を。人。小。足。也  
 一、人。を。命。しく。い。せ。く。笑。終。り。の。幸。苦。成。よ。し。り。不。仁。乃。お  
 一、糸。道。の。主。意。小。大。小。を。い。ま。と。云。へ。道。小。近。死。評。判。と。云  
 命。しく

一、伶人時えが物倍小武吉う伴小妙女吉喜死筆を拵まうと



とふハ竹小價の志はけりも毎尺物も唯喜奉のつゝの久しを  
上中下乃おとて世ふ喜も實もさるゝのなり。珠は勝るゝふ  
物を賞とりく家の重宝ふを辨るゝ言名あり。わい身の福も  
一のりく價を限るゝ引出物をいふ侍るゝ其器り名譽ある  
布し。わい身の福もわい身の福もわい身の福も一期生のる  
を恩成志るゝふなり。妙計のわい身の福も家小冥加何道に  
あつゝも不意の言々もわい身の福もわい身の福もわい身の福も  
さるゝ尺也ふなり。他人もさるゝわい身の福もわい身の福もわい身の福も  
そのいふ事ふ事代わい身の福もわい身の福もわい身の福も  
一竹筆の名匠小近は喜定とりふ何里近古の名作あり系あり近

わい身の福もわい身の福もわい身の福もわい身の福もわい身の福も  
中ふの乃喜定最上ありとぞ。近は小はさるゝ長門名作あり  
長門の作ハ近はより多しと。後よまゝ人のいひも。もつと  
よくわい身の福も喜定より大に勝るゝと。余多く尺が小ハ何  
まゝ勝るゝのりく優劣をさるゝ  
一筆も志喜の束るゝ作代最上と。是束尊の作乃中より二  
帯とりふ筆附ふ名物なり  
一梨花繪とて繪の柄小竹とて造りしるも鏡を付く敵陣へ  
繪を入るとする時。もも鏡を一放しはわい身の福もわい身の福も  
糸し繪をいふれど。味方小石倍り勢いをはりし。又紙を張

ぬたしし一放し其系統の作をすりつり。又鎗小不付とて人  
竹をく多銃を作ら乃法有り。明乃金幼致干謙をく人  
皆い器をく大小利をけしつり。金幼致ハ永樂年間の人小  
く北征紀とて著述有り。歴代小史小北征記を載り。又經  
國雄略ハ是等の器物乃る戎載り

一寛政甲寅三月八日伴誓西津領壺水村飯沼村乃迄し  
く終く大不麻特をりし。次弟小西特くく作賀大和  
乃西界太良生村石名系村迄よる。中間七八里より十里不及  
か糸狩りし。三四日乃る毎日狩りし。ハ知山より四年の鹿  
をけり。四年の鹿を糸狩りの物く土俗是ハ常麻と

名付く神物なりし。獵人も亦多し。ハ鹿四索とて  
啼ぬ常陸の鹿とて喜ま。お中りかとりなりとて奇  
異の獸なり

一寛政甲寅の春修祿小道後温泉の傍小畑あり。古昔より  
土民の汚く不浄を忌むり。ハ畑を穢まるとハ忽ち祟とて  
く寒熱を發せ。本年松山の土真乃考ま。此土中ハ必聖德  
太子乃温泉の碑をせしとて人々垢く之。果く大なる  
碑石を垢出せり。はれをこそとてつる。今ハ出終る前より水  
みく洗ひあしして足さし。ハ聖德太子をむり。温泉の  
身し時乃御文章をく。時ハ隨後の人乃姓名を載り。掃

代乃珍物なりとて悦の堀をくし。温泉のゆかり迫る土地を  
堀穿しゆきぬ。温泉のゆかり濁るゆきしを。所の人たは孫き  
り温泉小糸河の時ハ。山里の人其數百人饑渴もあふ  
ず。此碑堀る事無用なりとてい海に止るなり。徐  
義なり。又さす。小埋たり。ゆかり多た事なり。たと  
彼何りの人の語りた

一飛彈玉小坂村谷川乃傍小井河を水其赤色も味ハ  
五味茂油なりとて。是小治り病を治す伴冷ある  
薪もく温多く治る事なりとて

一大坂乃士山寺何某とて人なり。安永甲午年十月晦日

美田山の辺我過し。年なり。竹の喧し人の影し。夢笑  
かみぬ。ぬきをり。足れとる。ろ小人多し。そは。ゆかり。又人  
夢笑も。又ゆかり。足れとる。人なり。如此とて。數度ゆかり  
ゆかり。不思議とて。ゆかり。を。遠小。足あふ。す。絆も。濁り  
く。羽織着。ふ町人。と。天蓋を。上。ぬ。た。け。る。虚無僧と  
同道し。物語し。ある。河を。け。虚無僧の。教を。足る。ふ。塵が  
あ。作。る。顔の。し。不思。海。の。思。ひ。あ。り。ゆかり。年。り。の。形  
寺。額。あり。山。寺。氏。思。ふ。に。け。虚。無。僧。定。く。妖。怪。なる。を。し。一  
太。刀。ぬ。切。ん。の。を。く。ぬ。思。ひ。さ。り。ゆかり。年。り。の。形。と  
あ。り。ゆかり。時。さ。り。ゆかり。年。り。の。形。と。抱。き。つ





多し押しこむれど。彼町人なり。何者ぞと問ふ。扱く悪くしれり  
なり。只とましく問ふ。し。虚無僧とあり。扱のうらと  
扱あき。あしとせ。消失のぬ。つや。れ。思ろし。さ。な。付  
す。お。せ。し。なり。と。何。事。を。語。り。合。あ。し。と。り。た。我。は。遠。小  
乃。者。なり。当地の案内成る。後。後。者。を。命。死。町。ハ。何。所。ど。と。チ  
と。り。扱。其。是。と。く。ま。い。の。町。子。任。り。い。と。を。業。任。り。と。今  
者。は。は。篇。進。了。せ。し。ゆ。と。語。り。合。あ。し。と。り。た。我。は。遠。小  
山。寺。氏。乃。氣。妖。怪。の。徹。し。と。進。す。し。と。り。た。我。は。遠。小  
一。紙。燭。の。上。品。の。焼。耐。成。ぬ。と。大。を。と。も。せ。し。と。ま。れ。火。燃。き。紙  
燭。焦。や。し。と。ぞ。小。児。乃。戯。ふ。と。事。と。り。た。然。る。と。や

一淮南子曰。火不若取燧。寄汲不若鑿井。世間學問。乃とある  
ぞ。何事も人ふ寄る。と。事。成。成。就。せ。ん。と。又。人。を。養。ふ。事。の。似  
く。功。を。立。ん。と。思。ふ。如。此。と。人。ふ。猪。う。事。ハ。毒。死。の。み。なり。他。ハ  
と。り。か。り。の。色。の。我。を。勤。め。と。め。さ。く。求。む。は。非。の。つ。何  
る。も。成。就。し。人。より。我。成。成。と。移。ぶ。や。ふ。た。る。もの。なり  
一淮南子曰。古。琴。五。絃。至。周。有。上。伊。則。為。七。絃。今。乃。筑。琴  
箏。の。第。十。一。絃。を。止。と。名。付。け。第。十。二。絃。成。停。と。名。付。け。第。十。三  
絃。を。中。と。名。付。け。第。十。四。絃。義。解。し。が。く。緒。家。の。説。給。く。なり。止  
伊。ハ。淮。南。子。ハ。又。上。伊。と。し。止。の。字。淮。南。子。ハ。一。畫。を  
多。く。上。の。字。に。經。る。と。し。

一降真香ハ雷丁ライテイ付ツケの美ありと云ふ。又雷ライふくフクれくレク牙ガ乃ノ美くミクかり  
たふ者タフモノに。降真香カウマシウとて薰エンぶブれレを蘇ソ生セイしくク中ナカをマくクたふ煙ケリ  
除ノゾたタ去サくクしシ。今イマ昔コトよりヨリ降真香カウマシウと云ふトハ此コノ宋ソウ最サイ多タしシの物モノ  
よく降真香カウマシウハ河カのノ濱ハマ。余オノ前マヘ年ネン胤イン色シキ乃ノ降真香カウマシウをクりリ。是  
真物マコトありとト言イハしシ。いハまマ家カ不フ美物ミモノなりやナリとト云イハすス。其ソノ後ノチ法  
方ホウをク求モトめメども真マコトあるアリのみミ云イハはスしシ。

一河内國カウノクニより安閑アンケン天皇テンノウ乃ノ凌リョウ波ハ河カをクりリ。其ソノ中ナカよりヨリ云イハせシ  
玉タマ碗ワンと云イハふフ西琳サイリン寺ジの物モノとト言イハふフ。余オノ先マヘ年ネン是コノ波ハ河カよりヨリ三  
合カウ糸シもモ入イるル。假カ水スイ精セイ乃ノ潔ケツ白ハクあるアリのみミとト言イハふフ。  
なり。硝子シウシ玉タマ乃ノ潔ケツ白ハクとト言イハふフ。其ソノ美ミのノ精セイ乃ノとト言イハふフ。此コノ四五十年

此コノ物モノは紅毛ベニウシ玉タマとト言イハふフ。新アタラシ造ツクりシ物モノとト言イハふフ。日本ヨメニよりヨリ寄物キモノ  
ふハてテ今イマ昔コトよりヨリ八ハチ道ミチ年ネンのノ物モノなり。唐タウ去サりリ日本ヨメニ  
はくもモ白ハク色の硝子玉シウシタマ造ツクりシ物モノとト言イハふフ。然シカれドも安閑アンケン天皇  
乃ノ時トキ分ブン既イ小コ硝子玉シウシタマありアリとト言イハふフ。不フ美ミあるアリ事コトなり。西域セキトク  
小通船コトウセン河カをクりリ。船セン来キの物モノなり。又マタ日本ヨメニよりヨリ良工リョウクのノ物モノとト言イハふフ。  
をクりリ造ツクりシ物モノなり。是コノ物モノは時トキ代ダイ小コ今イマ昔コトよりヨリ每スベテ年ネンをクりリ造ツクりシ物モノなり。  
人物ニヒモノのノ大オホきキ古コ今イマ昔コトよりヨリ同ドウしシ。智チ惠ヱ情セイ欲ヨクもモ同ドウしシ。古コ今イマ昔コトよりヨリ今イマのノ如カドしシ。  
一論衡ロンヘイ曰イハク周シュウ成セイ王オウ時トキ倭人ヤマトノヒト獻ケン錫シキと云イハふフ。文モン又マタ云イハふフ。性セイ古コよりヨリ性セイ小  
乃ノ通船トウセンハハ今イマ昔コトよりヨリ同ドウしシ。

一論衡ロンヘイ曰イハク漢カン建ケン初ソ五ゴ年ネン湘水シウスイ去サ泉陵城センリョウシヨウ七シチ里リ。水スイ上ジョウ聚ク石シヨク曰イハク燕室エンシツ。

丘臨水有狹山其下巖淦水深不測。二黃龍見長出十六丈  
身大於馬舉頭顧望狀如園中畫龍燕室丘民皆觀見之去  
龍可數十步又見狀如駒馬亦大凡六出水遨戲陵上蓋二  
龍之子也并二龍為八出移二時乃入云

一漢土乃画家獨祿壽の園小陶朱公周文王南極老人成用  
也又蝙蝠鹿龜の三物を画くも何れも又三白乃園とりふく  
河雪中河辺路馬成画く。又月霜海成画くも何れも

一安永三年甲午五月廿七日より廿九日まゝ尾崎海中より小  
蟹點々登り浪華の川西岸皆蟹と成淀川みま  
し登り余を以浪花伏見堀小住川辺ありしがま

川乃水浅汲小一掬の中小蟹數十枚得有り。其蟹の大き豆の  
色よく透明あり

一同六月廿三日大風至上乃瓦飛ぶ木の葉乃ごとし大坂近邊  
乃海も大浪起り溺死乃人數万と有り。其翌廿四の夜  
早大坂所中小蛇言起り津浪おきり大坂町海あり  
と言罵り男女老弱亦成り。途逢ふ皆或ハ金銀を携  
へ飯持たり。騒動り一許あり。大坂中残り如地  
騒動り。所無し。誰いぬしなり。いふも  
不思成乃事なり。余ハ母成獲り家小在る後明以成  
て静まりし

一 舟に諸道の妨と八曾我物語の如く出づる所あり

一作勢山田の海中大風雨の後に東系多の里ア子コ多と云

云大舟にて羽成強と六七尺色黒し。近年と薩摩の人無入

崎乃南海ふ吹流と云く一島の崎に流進付。流の數年毎

後に又去佐より漂流の人何れも其船を云はくうの幸うし

と喜事よ海にせしものなり。彼島遠海の岸乃食ふ大成

多のりく人を及ぶとぞ人成思ふ。捕ふと命を物ゆく

多のりく肉成食存しと云く多のりく南方小去と云く

喜友秋乃嶋小舟り任。流の任の時ハ羽色の色向く海中

出づるとはハ羽色更く變じと云り。卯の大き五六合成入

漁利乃くし薩摩人其卵を携へて出づると云く多のり子

コ多のり

一 武藏上野界乃地。往來乃街道ハ人踏免も云御書く所

也。其何れ乃人々く怪しと云く。其年寛政甲寅乃春

里人寄合く堀穿て試し。小やがて金石乃如く堅く卿音く所

小堀尚まり。むりやとく大勢集りく堀を穿し。土中ハ空虚

一ツまく里人一人入り。人々驚た何れも逃のたらし。土

中よりたらし。人々の毒して。賜けよ。叫りよ。堀ハ未だ

死せざりしとて。皆集り繩成り。引上り。人々内去

いふあり。中り。やと云く。何れも志をば。庭ハ土ぢく。唯金石



く男子と成る則名成経平と改む。経平と奉寛政六年甲寅三十四五才あり。壯實長大乃男中書。然も具せり。春暮嘗く又る所たり。

一寛政甲寅妻伎中五樽物屋の女子松と名し。一夜奈熱して變じく男子と成る。年十七八才あり。松と名し。及名し。なるを京都の人中山元倫お多伎中下里居く。くしと物語あり。

北窓瑣談卷之四畢

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

